

[演題4]

よい退職をむかえるために ～女性退職者へのインタビューより～

秋 元 梢

医療リハビリテーション学科 作業療法学専攻

1. はじめに

就業・就労のあり方は、職業人生をどのように締めくくるか、どのような生き方を全うするかという人生の質にかかわる問題でもある。退職により生活は大きく変化し、作業の意味も変化する。そのため、作業療法士として高齢者の生活を支援するうえで、退職に伴う生活や作業、役割の変化について明らかにする必要があると考えられる。本研究では女性退職者を対象に、退職前後の生活や作業の違いを比較し、よい退職の要因を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2年前に退職した50代の女性スミレ（仮称）ならびに現在スミレと同居している夫（50代）、夫の父親（80代）の3名を対象に、個別にインタビューを実施した。インタビューの内容は本人の了解を得てテープレコーダーで録音し、逐語録を作成して対象者の経験を時間性、社会性、意識（意思）の視点で質的に分析した。

3. 結果

スミレの生活について時系列に述べる。

(1) 就職から退職まで

スミレは高校卒業と同時にA村の役場で働き始める。23歳の時同じ職場で働いていた男性と結

婚し、義父、義母と同居をはじめ。義父、義母との関係はよく、ほとんどトラブルもなかった。24歳の時に長女、29歳の時に長男、35歳の時に次女が生まれる。子供が生まれてからも義母が子供達の面倒をみてくれたため、仕事を継続することができた。

49歳の時A村が合併しC市となる。翌年32年間働いてきた役場からC市の市役所へ異動になる。市役所への異動に始めは動揺したものの同僚に恵まれ、友人もできたため結果として市役所に行けてよかったと感じている。4年間市役所で働き54歳の時に退職した。

(2) 退職を決めた理由

結婚後夫と、「2人とも公務員だからどちらかは早くやめよう。」という話はよくしており、村の合併の話が出はじめた頃から本格的に退職のことを考え始めた。その後、義母が認知症となり家事などが難しくなり始めたため、義母のことと、夫から「そろそろやめるか?」と言われたことがきっかけとなり、スミレは退職を決意した。退職することを決めた後義母に癌が見つかり体調も悪くなっていったため、退職後スミレが食事や着替えを手伝ったりしていた。そしてスミレの退職から6カ月に義母は亡くなった。

(3) 今の生活・今後の生活

スミレは現在主に家事を行いながら、花の世話や編み物、読書などを楽しんでいる。買い物や病院、美容院など、週に何回かは車に乗って外出している。また、学生時代の友人との交流を大事に

しており、現在でも定期的に食事に行っている。地域の人達とも交流しており、婦人会や生協に入っている。子供達には家で作っているお米を定期的に送っており、孫の世話をするために長女のところへ時々行っている。働いていた時と今の生活どちらがよいか聞いてみると、今の生活の方が「ずっとええ」と即答した。

来年には夫が退職する予定で、夫の退職後には今とは違う生活がまわっていると考えている。家にゆず畑があり、現在ゆずの世話は義父と夫が行っている。スマレはゆずについて知識がないため、夫が退職したら指導を受けながらともにゆずの世話をしようと考えている。しかし、現在のような「優雅な生活」が送れなくなることを残念にも思っている。

4. 考察

(1) 退職後の作業

スマレの作業の特徴は、花の世話や編みの物、読書など1人で行う作業よりも、生協での近所の人との会話や市役所の人・同級生との食事など人との交流を、退職前も退職後も大切にしていることである。スマレは現在家事や花の世話など、家での仕事や好きな作業を行いながら、定期的に他者と交流し地域にも参加しており、働いていた時からの人間関係を継続している。これらのことが影響して、現在の生活に満足していると考えられる。

(2) 「人生の絶頂期」

Laslett¹⁾ はまだアクティブに活動できるが、もはやフルタイムの仕事や子育てに従事しなくなった時期のことを「サード・エイジ」とよんでいる。自分のやりたいことをやり、自己の欲求を満たすことができる時期で、「人生の絶頂期」であると述べている。スマレは今まさに「人生の絶頂期」にあると言える。スマレは退職前より今の生

活の方が「ずっとええ」と話していた。なぜなら時間にしばられず、自分の思うように生活ができるからだと言った。今は自分のしたい作業をしながら自由な生活を楽しみ、夫の退職後には共にゆずの世話をするという目標を持ち、将来を見据えている。

(3) よい退職の要因

スマレの退職は本人・家族にとってよい退職だったと言える。その要因として第一に、しっかりと退職の準備をしていたことがあげられる。スマレは退職の準備として、20年ほど前から夫と、どちらかは早くやめようという話をしていた。そうすることで、早めに退職するという心構えをしていたと考えられる。スマレが退職を決意した1番のきっかけは義母の病気のことだった。義父と義母には、たくさんお世話になってきたため、義父と義母のために何ができるかを考えることで、退職後の生活を予測していたと考えられる。

第二に、退職のタイミングが本人、家族にとってよかったことがあげられる。スマレが54歳の時に退職したことで、義母はできる限り自宅で生活することができた。スマレ自身、長年お世話になった義母のためにできる限りのことができたと感じている。義父もスマレが自分や妻の面倒をみてくれたことに感謝している。夫は、家のことや母親のことをある程度スマレに任せておけるので、自分のペースで仕事ができるようになった。

第三に、スマレは退職する前から多角的役割を持っていたことがあげられる。前田²⁾ は、女性は多角的役割を持っているため、仕事以外でも生活の連続性を維持でき、定年退職という危機的移行においてもスムーズに適応できると述べている。スマレの場合、退職前から妻、母親、嫁、地域の一員として様々な役割を持っていた。退職後もこれらの役割を継続しながら新たな作業を行うことで、スムーズに生活を移行できたと考えられる。

5. 文献

- (1) Laslett P, In an Ageing World, New Society.
27, 1977, 171-173.
- (2) 前田信行：定年退職への移行と生活の質—
ジェンダー比較分析—。立命館産業会社論
集14：124-126, 2005.